

地元人材育成校へは「上位入学・上位卒業」を目指す「本格的指導」を!!

—人口減少社会を担う「地元人材」にも、ていねいな受験指導と、入学後の指導を!!—

開倫塾

塾長 林明夫

Q:「地元人材育成校」とは何ですか。

- A: (1)2025年の出生数は、68万人を割り込み、67万1千人と報じられる中、地方だけでなく大都市でも、人手不足はますます深刻化。地域を担う人材の重要性が増しています。「地元人材育成校」とは、地元の農林水産業、製造業、公共サービス、公的サービスを含む、ありとあらゆるサービス産業の、「実務を担う人材」を育成する「高校、大学・短期大学・専門学校・専修学校、大学院、日本語学校」などを意味します。
- (2)成績優秀者ほど、一所懸命に勉強。その結果、難関中学校、難関高校、難関大学に進学し、「地元」から離れて生活し、世界や日本、大企業や大きな組織のために活躍する機会に恵まれています。それはそれで立派、素晴らしい生き方と考えます。そのような人がいないと、世界は、日本は、大企業や大きな団体は、一步も動きません。多くの人々のためにありがたく思います。
- (3)ただ、よく考えると、地元の自治体や、医療・福祉、警察や消防、地元の企業、団体、地元の人々の毎日の生活を支える「地元人材」も欠かせません。
- (4)学習塾、予備校の多くは、世界や日本、大企業や大きな団体で、大活躍する人材を目指す塾生、難関中学校、難関高校、難関大学の「難関校受験生」を全力を傾注し指導、合格率や合格者数を競っています。それはそれで素晴らしいことと、高く評価し、敬意を表します。
- (5)それと同時に、競争倍率1倍前後や、定員を割り込むような「高校」「大学」「短期大学」や「専門学校」「専修学校」を「第一希望校」とする中学生や高校生に対しても、「地元を支える人材」として、「難関校」を受験する中学生や高校生と同じくらい前向きに、また、熱心に勉強させ、全教科、しっかりとした知識と、「学力」「学ぶ力」を身に付けさせていたただきたい、強く希望します。
- (6)よく考えれば、地元に残り、地元で活躍、地元の将来、地元に住む人々の日々の生活を支え、守る「地元人材」こそ、中学校や高校での勉強をしっかりとしてほしいと希望します。進学する高校や大学などが入りやすいからといって、受験勉強を怠ってはならないと考えます。
- (7)中学校や高校の定期試験は、各学年、各学期の学習範囲をきちんと学び直し、身に付ける素晴らしいチャンスです。高校入試、大学入試は、中学校や高校で学ぶ内容を総復習し、得意分野を伸ばし、不得意分野を少なくしてから、上級学校に進学する、またとない絶好の機会です。
- (8)「地元を支える地元人材」であればあるほど、中学校や高校でしっかり学び続け、さらに、地元の大学、短期大学、専門学校、専修学校、大学院などで深く学び、「地元を支える高度

専門人材」として活躍していただきたく存じます。

(9) 中学校の「調べ学習」「職場体験」や、高校での「探究型学習」「公共」は、「地元を知り、地元の課題や将来性を考える」、絶好の機会です。

(10) 専門高校だけではなく、普通科高校でも、「インターンシップ」や「キャリア支援教育」が盛んに行われるようになりつつありますが、どんどん加速するとよいと考えます。

Q：わかりました。では、どのように、倍率が定員を割り込むような高校や大学を受験する中学生や高校生に、「難関校」を受験する受験生と同じくらいの熱心さで、「受験勉強」をさせればよいのでしょうか。これは、水が飲みたくない馬に水を飲ませるのと同じくらい、難しいことではないですか。第一、簡単に入れるのに、たくさん勉強させたら、かわいそうなのではないですか。あまり聞いたことのない考えなので、想像を絶します。

A：(1) 「中学校や高校で学ぶすべての教科の勉強は、すべて役に立つ、高校や大学で全部役に立つ。社会に出て仕事や社会的活動、日常生活、よく生きるために役に立つ。一生役に立つ。役に立たない教科やその内容は一つもない」。ただし、全部役に立つのだけれど、「学んだことを自分のことばでいえる(表現・活用、用いることができる)のでなければ、役に立たない」。「中学校や高校で学ぶ内容は、社会で役に立たない」と思い込んでいる中学生や高校生がたくさんいます。学校や学習塾、予備校の先生も社会で役に立たないことを教えていると思い込んでいる先生がたくさんいます。「キャリア支援教育」として、しっかり〈教育〉すべきです。

(2) そのうえで、簡単に入学できる高校・大学などを受験する場合であっても、少しハードルを上げ、「第一志望校上位合格・上位卒業」を目指し、「難関高校」「難関大学」の受験生と同じくらいの熱心さで受験勉強、中学校3年間、高校3年間を過ごすようご指導したらいかがでしょうか。

(3) では、どのように「地元人材育成校」へ「第一志望校上位入学・上位卒業」を実現させるか。教科内容や、過去問対策などの受験指導と同時に、学習塾や予備校こそ独自の考えで、中学校3年間、高校3年間、しっかりと「キャリア支援教育」に励むことが、第一です。

(4) 地元の文化、伝統、歴史、地理、産業をはじめ、他の地域と異なる優位性や「特徴」を自信をもって伝え、また、小学校や中学校の「調べ学習」、高校の「探究型学習」、インターンシップなどを「活用」、「職業意識を醸成」することが求められます。

(5) 学習塾の「進学指導」の中に「キャリア形成支援教育」をどんどん入れ、「郷土愛」を育み、「地元を支える高度知識人材」の育成に励むことが求められます。

(6) 「地元人材育成校」として、わが塾や予備校の一番近くにある高校、大学、短期大学、専門学校、専修学校、大学院を「地元人材育成校」と定義。そこへの「進学者数」を大幅に増やすことは、「地元の発展に寄与する」と確信します。

(7) 同時に、各塾や予備校の塾生増、売り上げ増に直結します。「第一志望校上位入学・上位卒業」を浸透させれば、「高校部への継続」「高校部の塾生増」にも直結します。超少子化の中、学習塾や予備校の「活路」が見いだせます。

Q：学習塾・予備校・私立学校の経営幹部の先生方にお伝えしたいことは何ですか。

A：(1)日本の教育の原点は、足利学校や寺子屋であり、藩校、私塾です。吉田松陰の野山獄や松下村塾、適塾や慶應義塾です。

(2)特に参考になるのは、吉田松陰の「野山獄」「松下村塾」です。監獄の中で囚人の方々と共に学んだ吉田松陰は、日本の教育の原点です。

(3)この伝統を踏まえ、学習塾、予備校、私立学校は、国家有用の人材と共に、地域で大活躍する人材を育てました。特に、学習塾の原点、寺子屋は、地元人材育成の原点と考えます。難関校突破に加え、地元人材育成のために、「第一志望校上位合格・上位卒業」も実現させましょう。

Q：最後に一言どうぞ。

A：今月も、僭越とは存じますが、先生方がお読みになれば、参考になる本をご紹介しますことができます。

(1)一冊目は、渡辺京二著「私の幕末維新史」新潮選書、新潮社、2025年12月25日刊です。同著「私の明治時代史」新潮選書、新潮社2026年1月21日刊の2冊は、熊本市の真宗寺で行われた、同氏の「日本近代史講義、全11回」の速記録。名著、「逝きし世の面影」平凡社ライブラリー、平凡社、2005年9月9日刊の著者の最新刊です。先月ご紹介した、松元崇著「大恐慌を駆け抜けた男、高橋是清」中央公論新社、2009年1月10日と、重ねてお読みになると、明治維新、明治、大正、昭和前半が浮かび上がってきます。

(2)二冊目は、遠藤誉著「台湾軍事機密文書が語る中国『抗日戦争』の真相」新潮新書、新潮社、2026年4月20日刊です。現代中国の理解にも役立ちます。

(3)三冊目は、堺屋太一著「秀吉、夢を超えた男(上・中・下)」NHK出版、1995年刊です。2026年のNHKの大河ドラマ「豊臣兄弟」の「予習」と「復習」用として、最適の「テキスト」。歴史学研究会編「日本史年表」岩波書店、2017年10月28日刊と、「山川・詳説日本史図録第6版」山川出版社、2015年11月15日刊を、合わせて参照すると、わかりやすい。人名と地名には印をつけ、年号が出てきたら、西暦に直し、文の上の方にメモし続けると、歴史の面白さが倍増してきます。

○栃木県立足利高校で3年間同じクラスで過ごし、大学は、同じ慶應義塾大学に進学した、同級生で、コーエーテクモの創業者、襟川陽一君は、シュミレーションゲーム「信長の野望」「三国志」を世に出し多くのファンを得ています。バージョンアップも、30年間確実に行き、素晴らしいと考えます。複雑極まりないこの戦国時代を、どのようにゲームソフト化し続けているのか。いつの日にか挑戦し、知りたい気分です。皆様の中で、「信長の野望」や「三国志」に、改訂ごとに挑戦なさっている先生は、おられますか。

(4)四冊目は、藤原美喜子著「人生好転のルール55、ビジネスのプロは、上手に働いて幸せをつかむ」小学館、2009年11月25日刊です。日本人女性で初めて、ロンドンのシティで活躍させておられる藤原さんの処世術を55にまとめたた作品で、示唆に富みます。

(5)五冊目は、清川照美著「松下幸之助翁、心の時代を生き抜く言葉」東洋経済新報社、2026年4月7日刊です。松下幸之助翁感動の経営哲学をわかりやすく伝える、感動の作品。

(6)六冊目は、永山妙子著「国際金融ひとり旅、一途に迷わず生き抜いた」海外生活株式会社、

2026年4月15日刊です。マクドナルド銀座(日本1号店)に融資等、人を育て、企業を育て、国を育てる国際金融のプロ永山さんの一代記です。

○(4)～(6)は、すべて、この時代を代表する女性経営者の作品です。ぜひ一読を。

(2026年4月30日記)

\*筆者プロフィール、開倫塾塾長、開倫塾日本語学校理事長・校長、開倫ユネスコ協会会長